

芸術部会

研究主題

「一人一人の資質や能力をはぐくむ芸術教育の在り方」

I 研究主題設定の理由

現行の高等学校学習指導要領は、学習指導要領に示す基礎的・基本的な内容（いわゆる基礎・基本）の確実な習得を図り、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質や能力を育成することを基本的なねらいとしている。「資質」とは、生まれつきの性質や才能をいい、「能力」とは、ある仕事や成し遂げられるかどうかという総合的な力を言う。様々な資質や能力は相互に働き合い、引き出し合いながら高められるものであり、関連をもたせながら総合的に育成することが重要となる。

また、元来、生徒一人一人の資質や能力は極めて個性的であり、他と異なるものの見方や考え方をする力をもっており、芸術的嗜好や興味も自ずから異なっている。

学習指導要領の芸術の目標は「芸術の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、豊かな情操を養う」ことである。

そして、高等学校学習指導要領解説には、「芸術の幅広い活動」について、「様々なことを数多く体験するということのみではなく、生徒一人一人が内発的な動機に基づいて、多様な観点から芸術に対して主体的にかかわりをもっていくことを基本としたものである」と、示されている。

したがって、芸術の各科目の授業は、生徒が表現することの喜びや鑑賞する楽しさを実感しながら主体的に取り組む学習活動を通して、生徒に芸術のよさや美しさを感じ取らせるとともに、生徒一人一人の芸術的資質や能力を伸ばし、芸術を愛好する心情と感性を育て、価値あるものに気付く感覚や、深く感じ取れるような感性、そして美しいものや崇高なものに感動する豊かな心をはぐくむ授業でなければならない。

それが、生徒の個性や興味・関心に関係なく、一つの価値観、特定の知識や技能を教え込み、皆に同じ見方や考え方、表現の仕方をするだけを求めるような授業等になってしまっている場合は、生徒一人一人のもつ個性や特性が失われ、様々な資質や能力の育成についても効果の上がないものになってしまう。

まさに、題材等の設定の工夫や個に応じた指導の充実により、生徒一人一人のもつ芸術的個性や特性を見出し、生徒の資質や能力（＝生徒のもつ総合的な力）をはぐくむことが重要となるのである。

このような理由から今年度の芸術部会の主題を「一人一人の資質や能力をはぐくむ芸術教育の在り方」とした。

II 研究の概要

1 芸術科の評価の観点

評価を行う目的は、得意か苦手か、分かるか分からないかなどと、生徒を選別したり、うまいか下手か等の尺度で、生徒の技能等を序列化したりするためではなく、生徒一人一人の資質や能力をはぐくむことにある。

芸術科の評価の観点は、「関心・意欲・態度」、「芸術的な感受や表現の工夫」、「創造的な表現の技能」、「鑑賞の能力」となっている。この趣旨を表で示すと次のようになる。

【 評価の観点及びその趣旨 】

関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
芸術を愛好し、芸術文化を尊重するとともに個性を生かして意欲的、主体的に表現や鑑賞の活動を行い、その喜びを味わおうとする。	感性を働かせて芸術のよさや美しさを感じ取り、創造的に表現を工夫する。	創造的な芸術表現をするために必要な技能を身に付けている。	芸術を幅広く理解し、そのよさや美しさを深く味わう。

芸術科で育成する資質や能力は、この四つの観点に示された資質や能力である。

芸術科の各科目の指導において、この評価の観点に基づいて指導内容や指導方法を工夫し、生徒の学習の実現状況を評価していかなければならない。

芸術科の各科目の評価は、とかく最終的な作品や演奏などの結果のみに視点が置かれがちであるが、生徒が工夫や努力している点にも着目して、生徒の日頃の学習の実現状況を的確に把握し形成的に評価を積み重ねることが大切である。また、生徒が割当てられた部分を受け持ち、グループや小集団で行う活動の場合は、生徒一人一人の活動に目を向け、その役割を理解し、共に活動する喜びの実感をもてるように工夫することも重要である。

「最初に指導があり、次に学習があり、一連の活動の最後に評価があるのではなく、本来は、指導と学習と評価は最初から最後まで三つ編みのように関連し影響しあうものである。そこでの評価とは、出来上がった絵に金紙や銀紙を付す賞罰のようなものではなく、学習過程において、形成的にフィードバックされ、次の活動への指針となる教育的機能である。」(山梨大学・放送大学 栗田真司助教授)と言われるように、授業の実際の個々の場面で、活動への取組の様子(行為・表情・発話など)を丁寧に観察しながら、評価の観点に即して一人一人の生徒の課題を的確に把握し、常に指導の工夫と改善を図り、個に応じた指導をどう充実させるかが、今求められている点である。

また、一つ一つの授業のねらいと評価の観点を明確にし、生徒に事前に知らせることによって、指導と評価についての日常的な共有を図ったり、生徒による自己評価や授業評価を参考にし、生徒の側に立った授業改善を進めたり、授業公開・校内研修を活性化することによって組織的な取組としての授業改善を推進したりすることは極めて重要と言えよう。

2 研究の流れ

今年度の「東京の教育21」研究開発委員会の共通研究主題「個に応じた指導の充実を図る指導内容・方法の研究開発」を受け、また、昨年度の研究テーマ「生徒による授業評価を生かした授業改善」を更に発展させた、～生徒による授業評価を活用した校内研修の充実を通して～という副題をも考慮し、芸術部会としての今年度の研究主題を検討し、「一人一人の資質や能力をはぐくむ芸術教育の在り方」に決定した。

この研究主題に基づく授業実践には、各科目の特性、指導法の相違等があり、同一步調で研究を進めることにはかなりの困難があった。昨年度に開発した「生徒による授業評価」の内容を、どのように今年度の研究内容に含めていくか、最も基本的な部分で意見が大きく分かれた。特に今年度の全体の共通テーマ「個に応じた指導の充実」の部分で、生徒一人一人の技能や知識・理解、又は、興味・関心を授業の中でいかに生かし、その資質や能力をはぐくむ指導法はどのように行ったらよいかについて大いに議論し、煮つめていった。

今年度の芸術科の各科目の研究では、指導法の新しい試みだけでなく、授業の評価の工夫にも取り組んだ。

特に、生徒による授業評価を教師自身の授業改善の指針とし、指導と評価の一体化を図る実践や、個々の生徒が自分自身の現状や課題を認識し、その後の学習方法の改善を自ら見つけ出させるような評価方法の工夫について取り組んだ。

これらの様々な取組を通して、生徒は学ぶ目的意識を明確にもち、自ら学ぼうとする意欲が高まり、活気ある授業展開がされるようになった。

今年度、「一人一人の資質や能力をはぐくむ芸術教育の在り方」との主題の下、このように研究開発を行ったが、いくつかの点で課題も残った。取組の期間も限られており、多くの様々な課題についての授業による検証が十分にできなかったこと、紙面の関係もあり、事例の内容について詳細に掲載することができなかったこと、などが挙げられる。

しかし、今後数多くの実践を積み重ねていくことで、これらの課題も克服され、更なる指導の充実が行われていくものと考えている。

以下、芸術各科目の実践研究事例を示す。

Ⅲ 各科目における実践研究事例

(音楽)

題材名 「さくら」の後奏を^{こと}箏の技法を取り入れて表現しよう (音楽Ⅰ)

1 題材設定の理由

以前は高等学校に入学する生徒のほとんどが箏の初心者であったが、学習指導要領で和楽器の取り扱いが導入されたことにより徐々に小中学校で経験してくるようになり、年々初心者は減少している。経験者にとっては「さくら」は既習曲であるとも言えそうだが、音楽を選択する生徒の中にはまだ多くの箏の初心者があり、こうした経験の差を認めて個に応じた指導の充実を図り、すべての生徒が新しい知識や技能を身に付ける喜びを実感しながら、各自が感受性や技能に応じて表現できるような活動としてこの題材を設定した。

この題材では、箏の特徴的な技法をいくつか知り、その中から選択して自分なりの「さくら」の後奏を表現することにより、一人一人の意欲や主体的な表現を大切にすることを重視した。

また、生徒が日常的に触れる機会が少ない状況にある、日本の伝統音楽に直接触れる機会をもつことは、日本の伝統文化のみならず世界の諸民族の文化に対する関心をもたせ、尊重する態度を育成することにもつながっていくものであると考える。

2 題材の目標

箏の基本奏法や特徴的な技法を知り、テンポ感や間のとり方を感じ取ってそれらの表現を味わいながら、各自の感受性や技能に応じ工夫して表現する。

3 題材の評価規準

(1) 関心・意欲・態度

箏の奏法や特徴、テンポ感や間などの表現に関心をもち、自ら意欲的に表現してその喜びを味わおうとする。

(2) 芸術的な感受や表現の工夫

平調子の響きと箏の音色を味わおうとし、曲のテンポ感や間を感じ取ろうとする。

また、箏の技法を知って工夫して表現しようとする。

(3) 創造的な表現の技能

箏の基本的な奏法や特徴的な技法を身に付けている。

4 学習活動と具体の評価規準 (5時間)

学習活動	学習活動の具体的評価規準		
	関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能
「さくら」の主旋律を譜面通りに弾く。(1時間) ↓	教師の説明を良く聴き、手本を見て、意欲的に表現している。		箏の基本的な奏法を身に付けている。
「さくら」の後奏を譜面通りに弾く。(1時間) ↓		最後の合わせ爪に至る間の取り方やテンポ感を感じ取って表現を工夫している。 合わせ爪の後の余韻を聞き味わっている。	楽曲から感じ取ったイメージを器楽表現するための技能を身に付けている。 かき爪、割り爪、合わせ爪の奏法を身に付けている。
スクイ、輪連、裏連、引き色の技法で最後の2小節を弾く。(1時間) ↓	各技法に関心を持ち、意欲的に表現して、その喜びを味わおうとする。	各技法の音色や特徴的な表現を感じ取って表現を工夫している。	
スクイ、輪連、裏連、引き色の技法のうち、どの技法で表現するかを自分で決め、奏法譜に書く。(1時間) ↓	何度も良く聴いて自分の感覚にマッチする表現をしようと主体的に表現している。	各技法の音色や特徴的な表現を感じ取って技法を工夫している。	
自分で選んだ技法で「さくら」の後奏を通して弾く。(1時間)	自分だけでなく、自分とは違う技法を選んだ人の表現にも興味をもつ。		各技法の特徴ある器楽表現を再現するための技能を身に付けている。

5 結果と考察

この題材のポイントは経験に差がある個々の生徒が、各自の感受性や技能に応じて箏の特徴的な技法を選択して自分なりの表現をすることにあつた。箏の初心者はもちろん経験者にとってもなじみの「さくら」で終わることなく、スクイ、輪連、裏連、引き色という技法を知り自分らしく表現することは新しい学習内容であり、どの生徒も関心をもって取り組んでいた。

また、箏という楽器の特徴を理解し音色を味わって日本の音楽を表現することは、技能の習得に関して困難を感じながらも楽しい活動であったことが、生徒による授業評価アンケートの結果から得られた。限られた授業時数の中でかなり内容を詰め込んだ感もあり、計画当初に懸念していた技法の難しさを感じる生徒はやはり多かったが、それでも大多数の生徒は意欲的であった。

「さくら」という身近な題材で、箏の技法という未知で本格的な内容をも扱うことが、中学校での学習との違いを感じていい勉強になったと答えた生徒もいた。

箏が弾けて楽しかった、嬉しかった、おもしろかった。	8.7%
難しかったが楽しかった。やっていくにつれて楽しくなった、よかった。良い勉強、経験になった。	43.1%
技法を学べてよかった、本格的で楽しかった。	11.6%
やってみたらできた、できて嬉しい、わかって嬉しい。もっと知りたい、うまくなりたい、弾きたい。	12.7%
難しく大変だった。	8.7%
興味がもてない、楽しくない。	2.9%

個別指導では、まず一人一人の生徒が、課題にしっかり取り組もうとする姿勢をもてるよう、共感的な言葉がけを中心としながら、手本を間近に見せて実際の音色や奏法の理解を深めさせ、課題を確認させる。校内研修として授業を参観した他教科の教員からは、生徒が目の前で手本の音を聞いたときのインパクトは非常に強く、個別に指導する際にとっても有効であったという声が聞かれた。生徒が技能を身に付けるには模倣することが第一歩であり、自分にもできそうだという気持ちをもてるよう生徒を励まし、ほめて繰り返し練習させる過程で、徐々に習得できるようになると、生徒は表現する喜びを実感しながらより主体的に取り組むようになる。

また、一斉指導での評価を個別指導へ生かし、一人一人のつまずきや理解の足りない部分を把握して技能の習得を援助し、その個別指導の評価を基に、さらに、一斉指導を展開するという指導を循環的に繰り返すことが有効であった。

各自の感受性や技能に応じて表現するという点においては課題が残った。技法の持つ箏独特の表現をのびのびと楽しんだ上で自分の表現を工夫してほしかったのだが、生徒が選択の基準として重視するのは「弾ける」ことであり、比較的難易度の低いスクイを選択する傾向が強かったのである。技法の提示の仕方を工夫して、視聴覚資料等を活用して西洋音楽とは異なる日本音楽の表現法のエッセンスを示し、理解や関心を深めた上でプロの演奏を鑑賞するなどしてその魅力に気付かせ感受を深められると、難しそうだが挑戦してみようという意欲が高められたのではないだろうか。

また、表現の技能は評価しやすいが、各自の内面の感受は確認することが難しく評価しにくいという側面がある。感受が深まれば表現活動に意欲的になり、その結果、技能が習得できて感受も更に深まるし、技能の習得が喜びになるので意欲につながる。生徒の様々な資質や能力は、関連的・総合的に育成することが重要なのである。学習カードなどを適宜活用したり、鑑賞後に感想を話し合わせたりして生徒の内面の感受を確認するような取組も重要であろう。

6 まとめ

年間計画の器楽の中で、1学期は本題材のように独奏を行い、2学期はそれをもとに二重奏に取り組んだ。選曲は、生徒にとって箏でこんなこともできるという発見があるようなものを選び、箏＝伝統音楽という固定観念に縛られないよう工夫をした。

3学期は、自分で題材を決め主体的に取り組む発表会を企画した。1学期に表現技法を選ぶことで個人の表現を尊重し、個別指導を重視し基礎的な技能を確実に習得させることで関心・意欲を育て、2学期に合奏の楽しみや合奏における技能、表現の工夫を学び、3学期には表現の手段として、演奏形態も音楽のジャンルも自由に選択させるところまで発展させるのである。

音楽の指導においては、生徒の自己実現の喜びの実感と、生徒の学びのプロセスを重視した、学習活動の設定の工夫、そして、四つの観点で示された資質や能力の育成を図るための個別指導を含めた指導法の工夫こそが、実りある豊かな学習活動を実現するための重要な要件である。

(美 術)

題 材 名 「模写とイラストを利用した画集づくり」 (美術 I)

1 題材設定の理由

現代の高校生は、色彩感覚に優れており、基礎的な技能を学ぶことで、豊かな表現活動をする生徒も多い。また、多くの生徒は、筆や絵の具の使い方を学び、思い通りに表現する力を得たいと望んでいる。しかし、時間をかけて絵画制作に取り組んだ経験が少ないとの生徒の声も増えており、じっくりと物事に取り組む力や、感性や想像力を深く働かせる力、実際に表現する際の創造的に様々な技法を工夫する力は、やや不足しているようにも感じる。これらをふまえて、この題材を設定した。

この題材では、生徒が自ら選んだ美術作品を模写することを通して、自分が感じ取ったことや、自身の意図や思いを基に主題を生成し、様々な表現形式を学ぶことを目指した。

また、模写に続けて自分の「イラスト」を描くことで、模写で培った技能を自分の作品に応用させ、技能の定着が自然と図られることを目指すとともに、この様な表現活動の設定により、生徒自身が主体的に取り組む活動として、よい作品をつくろうという意欲が向上し、作品に対する愛着が高まり、自己実現的に様々な資質や能力が発揮され、はぐくまれることをねらいとした。




2 題材の目標

絵画、デザインの多様な表現に関心をもち、表現の幅の広さや美しさを感じ取り、自分の発想を広げ深め、様々な技能を生かしながら、創造的な表現をする。

3 題材の評価規準

- (1) 模写、イラスト制作、製本、装丁などの様々な要素を含んだ題材に関心をもち、意欲的、主体的に取り組む、創造活動の喜びを味わおうとする。(関心・意欲・態度)
- (2) 画家や友人の作品のよさを感じ取り、自分の表現の方法を工夫する。
(芸術的な感受や表現の工夫)
- (3) 筆や絵の具の使い方などの技能を高め、表現意図に沿って、創造的に表現する。
(創造的な表現の技能)
- (4) 画家や友人の作品の特質や工夫を感じ取り、そのよさや美しさを味わう。(鑑賞の能力)

4 学習活動と具体的評価規準 (22 時間)

時数	学習活動	学習活動の具体的評価規準			
		関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
1	画集を活用したブックトーク(作者・作品等について) 	模写する作品を考えながら、意欲的、主体的に鑑賞し、その楽しさや喜びを味わおうとする。			作品のよさや美しさを深く味わい、題材のとらえ方や表現の仕方のよさを感じ取る。
14 内 (2)	作品の選定及び部分模写 ・模写(1枚目) ・模写(2枚目)	模写する作品に学びながら、意欲的に制作に取り組もうとする。	作品の特徴やよさや美しさを感じ取りながら、表現方法を創意工夫する。	筆づかいや絵の具の混色等を工夫して、効果的に表現する。	美術の価値や歴史などを感じ取り、理解しながら、作品のよさや美しさを創造的に味わう。
	作者や作品、時代背景等について研究する。 	作者や作品、時代背景等に関心をもち、積極的に調べようとする。			
2	画集にタイトルをつけ、タイトルを主題としたイラストを制作する。 	表現したい主題を自ら生成するために、自らの内面に働きかけ、表現意図に応じて、試行錯誤しながら、自分らしく表現しようとする。	想像を働かせてイメージを湧出させ、主題を生成し、自己の意図に合った表現方法を創意工夫する。	模写で学んだ技法を生かし、意図に応じて創造的に表現する。	
3	様々な質や色の紙を使って製本する。			材料の特性や用具の使い方などを理解し、効果的に活用する。	
2	模写、イラスト、研究した内容等をまとめ、装丁する。				

5 結果と考察

- (1) 最初の授業に 50 冊ほどの画集を用意し、画集を使ったブックトークをした。
まず、たくさんの画家や作品に触れることで知識が広がり、それらの作品の中から模写する作品を選ぶことで、自分だけの一枚という意識を高めることができた。

- (2) 部分模写では、自分が写したい絵の写したい部分を選ぶことができるために、意欲を持って取り組み、それと気付かぬうちに筆や絵の具の使い方の基礎を学び、その後の自分の作品の制作に生かすこともできた。絵が苦手という生徒にとっては、サイズが12×12cm程度と小さいことも取り組みやすさのポイントであった。また、「部分模写」は、絵のどの部分を切り取るかを考えることでトリミングの練習となり、絵を描く時の効果的な構図を決める力を伸ばすことにつながった。
- (3) この題材では、2枚の「部分模写」を通して、二人の画家の技法を学ぶことになる。2枚続けて模写をすることで、1枚目よりも技能が身に付いていることが実感でき、意欲が高まるようであった。2枚目の画集は各自が図書館等で探すこととした。この際に、模写に取り組みだけでなく、その作品を描いた画家や技法、時代背景などについても調べることで、時代と芸術の関連性なども学ぶことができた。
- (4) 製本に使う用紙は各色用意して、自由に表紙と見開き用紙の色を選んで、製本するようにした。でき上がった本には、模写を張るだけでなく、調べたことをレイアウトやレタリングの工夫をして書くようにさせた。また、自分で決めた画集のタイトルにあった装丁を工夫させた。これらのことで、自分だけの一冊という意識を高めることができた。
- (5) この題材では、2枚の絵から連想される独自のタイトルをつけた画集が完成する。制作に当たっては、模写する絵や部分、画集のタイトル、イラストのテーマ、製本に使う用紙の色、装丁のデザイン、文章部分のレイアウトなどのすべてを各自に決定させ取り寄せた。そのためか、「生徒による授業評価アンケート」の結果でも、意欲的に取り組めたと自己評価した生徒が多く、技能の伸張についても実感できた生徒が多かった。
- また、生徒が模写した絵は、海外の美術館に収蔵されている作品が多く、自由記述欄に「いつか本物を観に行ってみたい。」という感想を書いた生徒も多く見られた。

6 まとめ

この題材には、技能の修得、構成力、発想力、鑑賞力の伸張など様々な要素が含まれているが、これらの力は、一回だけの取組で身に付くものではなく、繰り返し取り組むことで深まるものとする。このページの末尾に、この点を意識した2年間のカリキュラムの例を載せた。

また校外施設の活用として、生徒は夏季休業日中に美術館へ行き、それを新聞形式の一枚のレポートとしてまとめ、画集の中の一ページとして張ることをしている。美術館で実物に直接触れることで、画集では分からない実物の作品の素晴らしさに感動する生徒が多かった。

美術の授業においては、生涯を通じて美術を愛好することのできるような心情や、「生きる力」としての様々な資質や能力をはぐくむために、生徒の声に耳を傾けながら、生徒の学びのプロセスを重視し、カリキュラムや題材及び指導方法について、不断に改善を図っていくことが重要である。

2年間の美術カリキュラムの例（M高校における実践例）

学期	題材	時数	内容	育てたい力
I	・名前のレタリング	2	・スケッチブック表紙に自分の名前をレタリングする。	・レタリングとレイアウトの基礎的能力
	・静物画(鉛筆)	2	・F8の四分の一サイズでの画用紙を利用した鉛筆デッサン	・デッサン力の育成。画面構成の基本的な考え方
	・静物画(着彩)	16	・F8サイズキャンバス、アクリルガッシュを使い、組んであるモチーフから、一種を選択しての静物画制作	・画面の構成力・色彩(明度、彩度、色相)の絵画への応用 ・木炭、筆、絵の具の使い方等の技法の習得
夏	・美術館レポート	夏	・美術館へ行き、新聞形式でレポート作成	・鑑賞する力、新聞形式にまとめることでのレイアウトの能力
II	・模写を利用した 画集制作	13	・模写(部分模写、2枚)	・鑑賞力の育成、絵の具の混合法、筆遣い等の技法の習得
		2	・画集にタイトルを付け、それに合わせたイラスト制作(1枚)	・自分のイメージを形にする際の構成や色彩の応用法の習得
		2	・画家、作品研究のプリント制作	・鑑賞力の伸長。流派や時代背景も含めての鑑賞
		5	・製本し、内容をまとめ、装丁する。	・製本、装丁を利用した構成力の育成
III	・詩、句を利用した 版画制作	8	・詩、句を利用した版画の原画制作	・自分のイメージを画面にするための構成力の育成
		6	・原画を利用した木版画制作	・版画や木版画の技能の習得
I	・開くカードの制作	2	・折ったカードを使って、同じ物から、違うイメージを考える。	・発想力の伸長。・各自の表現の独自性の確認
	・風景画(教室)	2	・F6サイズ画用紙への美術室内の鉛筆デッサン	・線遠近法の基本の習得
	・風景画(校内)	16	・F8キャンバス、アクリルガッシュを使って、校内風景制作	・空気遠近法の基本の習得。・自分独自の表現の追求
夏	・美術館レポート	夏	・美術館へ行き、新聞形式でレポート作成	・美術には様々な分野のあることを知る。感性の向上
II	・自由制作	18	・自分が今まで学んできたことの集大成として、作品の形式や材料まで含めて、自分自身で考えた自由制作	・生涯にわたって美術を愛好する心情の育成のために、各自の興味のある分野や得意分野の力の育成と独自の表現の追求
	・デッサン(花)	4	・日本画制作の原画としてのスケッチ制作	・デッサン力の完成、自然物の中にある美しさの発見
III	・日本画制作	14	・日本の伝統文化である日本画の制作	・伝統文化への興味・関心。画面の構成、色彩応用力の向上

(工 芸)

題 材 名 「銀板材を使ったアクセサリーの制作」(工芸Ⅰ)

1 題材設定の理由

最近では銀細工の材料が手に入りやすくなり、手軽に指輪やネックレスなどをつくることができるようになった。生徒の銀細工への関心は高い。まず生徒が興味をもつ題材であることに着目した。また、金属加工の制作過程での様々な学習要素を通して、ものをつくり出す喜びや使う楽しさを味わい、目標に向かって実現するための知恵や方法を身に付けることができる。ものづくりを通して、一人一人の資質や能力をはぐくむことをねらいとしこの題材を設定した。

2 題材の目標

銀を使ったアクセサリーに関心をもち、手づくりのよさや美しさを感じ取り、材料の特質や技法を生かし工夫して制作し、ものをつくり出す喜びや達成感を味わう。

3 題材の評価規準

(1) 関心・意欲・態度

生活の中で使われているアクセサリーに関心をもち、意欲的、主体的に表現や鑑賞を行い、その楽しさや喜びを感じ取り、生活を心豊かにするものをつくろうとする。

(2) 芸術的な感受や表現の工夫

感性を働かせて豊かに発想し、あったらよいと思う夢と用途と美しさを考え工夫して表現する。

(3) 創造的な表現の技能

制作方法を理解し、材料や用具を活用し、手づくりのよさや美しさを求め創意工夫して制作をする。

(4) 鑑賞の能力

互いの作品の意図や表現の工夫に気付き、形体や材質の美しさ、機能との調和を感じ取る。

4 学習活動と具体的評価規準 (16 時間)

学習活動	関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
事前に宿題とされた課題「生活の中で使われているアクセサリーを探す」を基に話し合う。(1時間)	アクセサリーと生活と人のかかわりを積極的に考えようとしている。			生活の中で使われているアクセサリーのよさや美しさを感じ取る。
厚紙やケント紙による構成練習(1時間)	銀細工と関連させ、平面から立体をつくり出す喜びを感じ取ろうとする。	折る、曲げる、切るという加工方法を使って、板材から発展できる形を工夫して表現する。		
アイデアスケッチを描く。必要に応じて紙や油土で試作をする。(2時間) 材料：銀板材 60×50×0.8 銀丸線 1.0 径	意欲的にアイデアを考え出そうとする。	構成練習を生かし試作をするなど、自己の考えを確認しながら用途と美しさを考え、つくってみたいものを豊かに発想する。		
制作(11時間) アイデアスケッチをもとに銀板に形を写し取り、糸鋸で切り抜く。 デザインに合った加工方法を選び、工夫して制作をする。 (槌目加工、打ち出し等) 精密ヤスリや金属磨きで仕上げる。	つくることの楽しさや喜びを感じ取り、意欲的に制作する。	加工の過程で金属の硬さや材質感を感じ取り、手づくりのよさを発見し表現に生かす。	金属の特質を知り、制作手順や技法を理解し創意工夫して表現する。 構想と加工方法が合っているか吟味しながら制作する。 目的や用途に応じて用具を選び、安全で適切な取り扱いをする。	
制作過程を振り返りワークシートをまとめる。 他者の作品を鑑賞する。(1時間)	友人の作品を鑑賞し、美しさや優れたところを感じ取ろうとする。			自分の制作を振り返り客観的に見るとともに、友人の作品の工夫や心遣いなどに気付き、手づくりのよさを味わう。

5 結果と考察

実際の制作の導入部分の事前課題として、「生活の中で使われているアクセサリーを探す」というテーマで宿題を出した。普段からアクセサリーに興味を持っている生徒は、身に付けてみたいアクセサリーを見つけスケッチをしたり、雑誌を持ち寄ったりした。自分の机に飾ってあるお気に入りの小さな写真立てを持ってきた生徒もいた。身近な生活に目を向けさせ、使われているもののよさに改めて気付くきっかけとなり、制作への意欲の喚起についても、大きな効果があった。また、厚紙や油土で試作することで、形体を確認することができると同時に技法や制作の流れを予測し、銀板に無駄なく板取りするための配置を考えることもできた。

アイデアスケッチの段階で、つまずきのある生徒には、生徒の言葉に耳を傾け、関連する例を示すなどして、イメージをより具体的にできるように助言をした。

制作過程において手引きの糸鋸の扱い方、曲げや打ち出しなどの加工方法、金属板の焼き鈍し方法、ヤスリがけから研磨までの過程などについて説明するときは、実演しながら行い、用具や工具については正しく安全な扱いをするように十分注意を促した。

銀細工用の糸鋸の刃は細く折れやすいため、切り抜くのは根気の要る作業である。苦勞が多い分、切り終えた時は達成感を実感することができる。その他ヤスリがけがうまくいった時の喜び、ぴかぴかに研磨した金属の質感が現れた時の感動、自分でデザインしたものが完成したときの満足感などを、生徒が感じ取ったことが、生徒による授業評価の記入から分かった。

また、計画的に進められたかという点について反省する生徒は多かったが、これは、思い描いたことと実際の食い違いを制作して初めて気が付き、計画を修正せざるを得ないがゆえである。制作途中の、当初の案の変更や計画の修正は、より良いものを目指すために必要と思われるので、生徒の考えや自主性を尊重しながらアドバイスを行った。

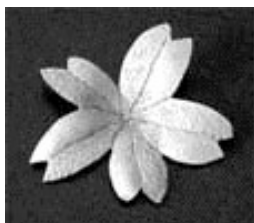
生徒による授業評価アンケート 集計結果(41名・項目は抜粋)								
項目	よい		少しよい		あまりよくない		よくない	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
先生の説明(課題の内容や作業の手順)	36	88	5	12	0	0	0	0
先生の説明(用具や工具の扱い方)	35	85	5	12	1	2	0	0
授業内容・課題設定	35	85	5	12	1	2	0	0
先生の熱意・工夫	27	66	11	27	3	7	0	0
興味をもって授業に取り組みましたか?	取り組んだ 33	80	まあまあ取り組んだ 8	20	0	0	0	0
制作は思い通りに進めることができましたか?	できた 12	29	ややできた 21	51	あまりできなかった 7	17	できなかった 1	2
自由記述欄								
自分で考えたデザインが形になってでき上がったこと、思った以上にうまくできたときに嬉しかった。							19	46
磨いてぴかぴかになったとき嬉しかった。							7	17

6 まとめ

工芸 I では、最初に造形の基礎練習として、ケント紙を使った立体構成を行う。次に竹や籐を使って笛やマラカスなどをつくり、つくる楽しさを味わう。その後、木を素材としたものづくりに入り、動くおもちゃの制作を行い、最後に、銀の板材を使ったアクセサリーの制作に入っている。

制作過程のいろいろな場面を通して、生徒の良いところを認め、共感的な個別指導を中心に、助言や技術指導を行っている。教員側が生徒の伸長の変化を見出す場合もあるが、生徒自身が主体的に取り組む中で、自分の良さや可能性を自ら見つけ、実現できた充実感を味わうことが、次のステップへの意欲や資質をより高めることになると考える。

また、この銀細工の制作のように、手と感覚のすべてを働かせて作り出す手仕事のよさを多くの生徒たちに体験してほしい。手間をかけ自分でつくる体験を持つことは、ものを大切に作る気持ちをも育てるであろう。



(書 道)

単元名 「導入期における漢字仮名交じりの書」(書道Ⅰ)

1 単元設定の理由

生徒一人一人が個性を生かし、感性や能力を発揮し、興味をもって授業に自発的に取り組むためにはどのような授業をしたらよいだろうか。中学校で「国語科書写」を学んできた生徒にとって、身近なものとして取り組みやすく親しみを感じられるのは「漢字仮名交じりの書」である。個性や能力を生かし、自分らしく文字を自由に表現することを通して、「芸術」としての「書」を知り、書くことへ興味をもつとともに、喜びを味わうことができる「漢字仮名交じりの書」は、本格的な書道の学習の導入期にふさわしい単元である。

2 単元の目標

「漢字仮名交じりの書」の創作を通して、文字を書くことの喜びを知り、書に対する興味・関心を高め、書よさや美しさを感じ取る。創造的な学習活動を通じて自己を主体的に表現する能力を身に付ける。

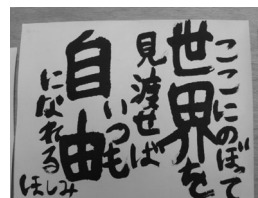
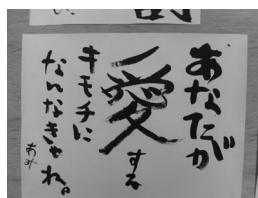
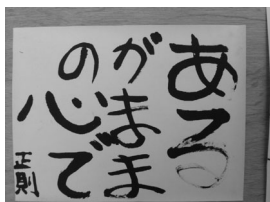
3 単元の評価規準

- (1) 「漢字仮名交じりの書」の創作を通して書表現に関心をもち、意欲的な学習態度で主体的に表現活動を行う。(関心・意欲・態度)
- (2) 感性を働かせて、「漢字仮名交じりの書」のよさや美しさを感じ取り、意図に応じた創造的な表現を工夫する。(芸術的な感受や表現の工夫)
- (3) 「漢字仮名交じりの書」の創作を通して、用具・用材の特性を生かした基礎的な表現技能を身に付け、自己を主体的に表現する能力を伸ばしている。(創造的な表現の技能)
- (4) 「漢字仮名交じりの書」の鑑賞を通して、自分や他人の書の美の多様性を発見し、そのよさや美しさを深く味わう。(鑑賞の能力)

4 学習活動と具体的評価規準 (8時間)

学習活動	関心・意欲・態度	芸術的な感受や表現の工夫	創造的な表現の技能	鑑賞の能力
「漢字仮名交じりの書」の鑑賞と、自分が表現したい言葉の選定。(2時間)	「漢字仮名交じりの書」による表現に関心をもち、活動に主体的に取り組む。	いろいろな作品から「漢字仮名交じりの書」のよさを感じ取る。		日常生活の中にもある「漢字仮名交じりの書」の、多様な表現方法やよさを理解する。
自分が選定した言葉を毛筆で表現することで線質の違いを深く理解し、用具・用材との基本的な関係を考える。(2時間)	意欲的・主体的な活動を通して、自らの表現活動を楽しむ。	感性を働かせて、漢字と仮名の調和と線質の関係について理解し、自分の意図に応じて、表現を工夫する。	用具・用材の特性を生かし、漢字と仮名の線質の調和を図る基礎的スキルを身に付けている。	
グループによる「漢字仮名交じりの書」の相互鑑賞。半紙による作品制作。本時のまとめと自己評価。(2時間)	他の生徒の表現方法に興味をもち、自らの作品制作に主体的に取り組む、充足感や喜びを味わおうとする。	多様な表現方法を理解し、自分の書の創作に生かしている。		他の生徒の作品について、よさや美しさを感じ取る。
クラス全体による漢字仮名交じりの書の相互鑑賞と画仙紙半切 1/2 または 1/3 への作品制作。全時のまとめと自己評価。(2時間)		自らの表現意欲を高め、線質、字形、全体構成などについて表現を工夫する。	創造的に表現するための、用具・用材、線質、字形、全体構成などを考えた表現のスキルを身に付けている。	他の生徒の作品のよさ美しさを深く味わい、鑑賞と表現は相互に関連していることを理解する。

【完成作品例】



5 結果と考察

- (1) 身近にある様々な「漢字仮名交じりの書」を鑑賞することで、書道に対する興味や関心が生まれてくる。線質や用具・用材の知識を得ることで、書道には様々な表現方法があり、筆法や筆の材質等によっても異なった線が表現できることを発見する。自ら学び、主体的に表現活動を行うことができるのが「芸術」であり、「書道」はその中に含まれる教科であるということを理解させることが導入期には一番大切であろう。
- (2) 「漢字仮名交じりの書」による表現では、言葉の選定は重要なポイントになる。自分で創作できなければ本や歌詞を参考にして、今の自分を一番よく表している言葉を必ず自分で選ぶようにする。
- (3) 作品完成時には半紙ではなく、画仙紙半切1/2や1/3を自分で選んで使用させるのは紙面の大きさに対して文字を自分で構成し工夫して書くようにさせるためでもある。行間の広さ、余白、文字の大小など半紙に書いたときには十分に表現できなかった部分も、この大きさにすれば、様々な工夫により多様な表現が可能となる。
- (4) 三～四人を一つの班としてグループ学習を行い、自分の作品と他の生徒の作品を鑑賞しアドバイスを与えたり受けたり、また、クラス全体での相互鑑賞活動に展開することで、学習意欲を効果的に高めることができた。
しかし、中には一枚書いて「完成した」と、安易に満足してしまう生徒もいる。その場合は、その作品のよさや面白さについて共感的に理解しながら、異なった視点を具体的に示し、さらに表現してみるよう助言する。書くということは自分が主役だという気持ちをもたせることさえできれば、生徒は常に自己の中に新しい課題を自ら設定し、興味・関心・意欲をもって学習を進めていくことができる。
- (5) 自己評価票に毎時間学習した内容のまとめ、自分の作品制作の意図など書かせ提出させると、作品や制作の様子からだけではなかなか分からなかった生徒の思いや意図、学習への取組の様子を知ることができる。たとえ作品が未完成の場合でも、その生徒の今日のねらいは何であったかを知ることができた。次の授業を進める上での助言のヒントにもなった。

6 まとめ

生徒の様々な資質や能力を伸ばすためには、自らの思いや意図を大切にして主体的に表現したり、新しい価値を発見したりする喜びの実感は欠かせない。

そこで、「漢字仮名交じりの書」の学習を取り入れて、今の自分を見つめ直し、ねらいや意図をもって表現する言葉を考えさせると、自ら進んで様々な表現の工夫に取り組めるようになる。

さらに、「漢字の書」や「仮名の書」等を通り学んだ後に、再度、「漢字仮名交じりの書」の単元を設定し学習するようにすれば、導入期より筆法から墨色や書体や線質に至るまで、様々な技能が高められているので、「古典」を自分の作品に生かして工夫したり、表現方法を応用したりして、導入期に書いた作品より一層進歩した作品を完成させることができる。

高等学校における書道の授業は、書による表現活動の喜びを実感させ、生涯にわたり書を愛好する心情を育てるものでありたい。